



Title	＜紹介＞石原深予著『尾崎翠の詩と病理』
Author(s)	平井, 華恵
Citation	語文. 2016, 105, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70974
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

石原深予著『尾崎翠の詩と病理』

平井華恵

尾崎翠は、これまでその作品の「詩精神の高さ」、そして「非正常心理への関心」を指摘されることが度々あったにもかかわらず、それらの観点からの作家・作品の分析は多くはない。本書は、尾崎翠の作品において重要な事項として言及されながらも、従来研究が深められてこなかった「詩と病理」の観点から、近年とみに再評価の動きが高まっている尾崎翠という作家および作品の一方的な「神話化」からの脱却を目指す立場をとる。

本書の構成は、作品論を中心とした全五章の論考を載録した論文編、および資料編から成る。以下、その内容の概略を紹介する。

第一章「第七官」をめぐって——明治期から昭和初期における「第七官」は、翠の代表作である小説「第七官界彷徨」で用いられる「第七官」の語についての分析である。石原氏は、まず「第七官界彷徨」発表以前の「第七官（感）」の用例を渉猟し、「第六官（感）」の用例をも参照しつつ、従来翠による造語、あるいは仏教の唯識論に由来すると考えられてきた「第七官」の語誌を、新たな視点から捉え直す。

第二章「第七官界彷徨」論——「喪失感」と「かなしみ」は、「第七官界彷徨」の作品論である。第一章で明らかにした「第七官」の語誌を踏まえ、作品中における「第七官」の語について、

主人公の抱く「喪失感」との関わりから論じる。加えて、作中に登場する小道具や芸術文化、観念的な用語の時代背景の分析から物語内時間を推定し、関東大震災を経験したと想定できる語り手が抱く喪失感や悲哀を読み取ることを試みる。本作品を現実の時間軸で捉え、作品の解釈に新たな可能性を開く論である。

第三章「歩行」論——おもかげを吹く風、耳の底に聴いた淋しさ——は、小説「歩行」の作品論である。石原氏は、従来「円環構造」の作品として論じられる傾向にある本作品が「直線構造」としても捉えられることに着目し、再検討する。論の焦点は、主人公である「私」が、ちかしい人物との離別により抱いた「喪失感」である。「喪失感」を抱いた「私」が、一時的にとはいえ彼の「おもかげを忘れる」ことに至った経緯の読解から、石原氏は「おもかげを忘れる」こと、すなわち「神経の疲れ」を癒されることについて、「詩」を創作することや「詩」を与える「詩人」が治療者としての役割を持つと論じる。

第四章「こほろぎ嬢」論——神経病、反逆、頭を打たれること——は、小説「こほろぎ嬢」の作品論である。まず石原氏は、語り手「私たち」の性質、作中に用いられる「桐の花」「こほろぎ」の表象への詩歌からの影響、こほろぎ嬢が思慕する異国の詩人の物語の三点を中心に、先行作品からの影響を看取する。また、作中における「神経病に罹ってゐる文学」の定義をめぐり、病に纏わる不健康で否定的なイメージと、新たな創造の可能性を孕んだ肯定的なイメージとの両義性を指摘する。またこほろぎ嬢の

「頭を打たれる感覚」の考察では、作中のモチーフの共通性や対照性を通して、こほろぎ嬢の抱える孤独を読み取り、「基本的信頼」の欠如が彼女の「神経病」の症状を引き起こすと論じる。

第五章「地下室アントンの一夜」論——ロシア文学受容、統合失調症の精神病理を補助線として——は、小説「地下室アントンの一夜」の作品論である。本小説は、尾崎翠が「統合失調症急性期の状態にあった」とされる一九三二年八月に発表された作品である。石原氏はまず、尾崎翠が関心を抱いていたロシア文学の享受の様相を踏まえ、人物造形と作品構造の観点から、本小説にチェーホフ「決闘」およびエヴレイノフ「心の劇場」の影響が見出せると指摘する。加えて、本小説に登場する詩人土田久作の内面の描写に統合失調症の陽性症状が認められることに言及し、その病理を考察する。

終章においては、第五章までの内容の総括に加え、尾崎翠の女子大生時代を回想した詩「もくれん」における「私」の聴覚の回復および肯定的な女詩人像の回復について述べる。

資料編では、「新たに確認できた尾崎翠自身による書簡・作品」、「新たに確認できた同時代評および同時代人との関係を示す資料」を挙げる。従来の全集には収録されていない作品をはじめ、橋浦泰雄・秋田雨雀ら同時代人と尾崎翠との交流や、同時代における作品の評価を裏付ける資料など、貴重な資料が豊富に紹介されている。資料には、著者による丁寧な解説が付され、尾崎翠の人物像をより深く知る手立てとなる。研究上においても、一読者に

とっても非常に有益な情報である。

本書は「詩と病理」を軸として尾崎翠の作品を解釈することを主眼とするが、その背景として、著者が尾崎翠の作品に見出した「喪失感」への探求心があるという（あとがきより）。論考においても、「喪失感」への言及はしばしばあり、「詩と病理」と表裏をなすキーワードとして、著者の一貫した問題意識がうかがえる。著者は、抽象的なキーワードをテーマとしながらも、語誌や先行作品の丹念な調査を踏まえつつ、新しい視点から読みの可能性を開く。装幀に小鳥ともくれんの花を配した瀟洒な本書は、尾崎翠作品の読者に新鮮な発見を与える一冊である。

（ビニング・ネット・プレス、二〇一五年三月、三、五〇〇円＋税）

（ひらい・はなえ 本学大学院博士後期課程）